

令和6年度

研究集録

—— 第52卷 ——

令和7年3月

岩手県高等学校教育研究会
特別支援教育部会

目 次

部会長挨拶	1
-------	---

【各校実践要旨】

岩手県立盛岡視覚支援学校	2
岩手県立盛岡聴覚支援学校	3
岩手県立盛岡となん支援学校	4
岩手県立盛岡青松支援学校	5
岩手県立盛岡峰南高等支援学校	6
岩手県立盛岡みたけ支援学校	7
岩手県立盛岡みたけ支援学校奥中山校	8
岩手県立盛岡ひがし支援学校	9
岩手県立花巻清風支援学校	10
岩手県立前沢明峰支援学校	11
岩手県立一関清明支援学校	12
岩手県立気仙光陵支援学校	13
岩手県立釜石祥雲支援学校	14
岩手県立宮古恵風支援学校	15
岩手県立久慈拓陽支援学校	16
岩手大学教育学部附属特別支援学校	17
学校法人カナン学園 三愛学舎	18

【規 約】

岩手県高等学校教育研究会	19
岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会	22

令和6年度 研究集録の刊行に寄せて

岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会長
(岩手県立宮古恵風支援学校長)
藤原 淳一

現在の学習指導要領は、幼稚部、小学部、中学部が平成29年4月に、高等部が平成31年2月に公示され、令和4年に全学部の全面実施となりました。各校では、この学習指導要領に基づき、教育課程の検討や評価のあり方等について研究・研修を深めながら、日頃の学習活動を推進してきたものと考えます。全面実施から2年が経過する現在では、様々な取組の中で充実が図られ、新たにチャレンジする内容を検討したり、見えてきた課題に対応したりと着実に次の段階を見据えた取組が進められているものと承知しているところです。しかし、このような状況にある中において、令和6年12月25日に文部科学大臣が中央教育審議会に学習指導要領の改訂について以下の4つの主たる事項を諮問したとの報道がありました。

- 1 質の高い、深い学びを実現し、分かりやすく使いやすい学習指導要領の在り方
- 2 多様な子供たちを包摂する柔軟な教育課程の在り方
- 3 各教科等やその目標・内容の在り方
- 4 教育課程の実施に伴う負担への指摘に真摯に向き合うことを含む、学習指導要領の趣旨の着実な実現のための方策

先行き不透明な予測困難な時代の到来や教育に求められるものが多岐にわたり、かつ、目まぐるしく変化している状況にあることを随所に感じている私たちにとって、このような報道等を目の当たりにすると、改めて「状況が変わりゆく速さ」を実感することになったのではないのでしょうか。私たち教職員は、この変化やその速さにしっかりと対応していくために、常に学び続け、新たな知見を得、実践的な授業力・指導力につながる専門性の向上を図っていくことが必要です。特別支援教育部会が推進する研究・研修活動は、その大きな役割を果たすものであると考えます。

今年度も各校の研究実践に基づく成果を御提供いただき、おかげさまで特別支援教育部会研究集録第52号をまとめることができました。本研究集録を通じて、各校における研究実践が特別支援教育に携わる私たち教職員の専門性向上の一助となりますことを願っております。

なお、今年度より宮古恵風支援学校が、岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会の事務局を担当させていただいておりますが、これまでの会員の皆様の本部会運営への御協力に感謝を申し上げ、研究集録刊行の御挨拶とさせていただきます。

盛岡視覚支援学校

研究テーマ

「視覚障がい教育の専門性に基づく指導の充実」

～学びあいや授業づくりを通して～

(2年研究 2年次)

1 全体研究

(1) 研究目的

- ①共同で学びあったり、研修を充実させたりすることによって専門性の維持・向上を図る。
- ②視覚障がい教育の視点から授業実践に取り組み、その評価や改善を通して授業力の向上を図る。

(2) 研究内容・方法

2年研究の2年次である本年は、昨年度立ち上げた視覚障がい教育の専門性の向上のために研修、研究が必要な6グループでの研究を継続した。グループごとに毎月研究会を行い、1年次の課題や改善点を生かして、授業実践や事例検討に取り組んだ。また、各グループの実践や事例を周知する機会を設定し、研究内容を共有し、学びを深めた。

(3) 研究実践

以下の6グループで研究を進めた。各グループの実践を以下にまとめる。

① 点字指導

点字使用の児童生徒の授業を担当している職員の授業を見合い、グループ内で授業研究会を行った。また、本校理療科の点字使用職員を講師として、点字指導の基本についての学習を行った。

② 視覚補助具を活用した弱視指導

中学部生徒を対象とした買い物学習の授業研究を通して、生徒の特性と興味関心に基づくルーペの活用について考察した。

③歩行指導

担当する幼児児童生徒の歩行に関する課題を共有し、中学部生徒の歩行について事例研究会を行った。また、歩行研修会を行い、手引きの仕方などを学んだ。

④触察の仕方に関する指導

教師が題材を触りながら教材を作成する演習を通して、効果的な触察を学び、指導する際の配慮や手立てを考えた。

⑤理療科における指導

「理療科におけるデジタル教材の活用」をテーマに研修会を行った。理療科におけるデジタル教材の活用状況について報告し、活用のための体験学習を行った。

⑥寄宿舍における支援

これまでのアセスメントの方法および個別のQOL計画の様式について見直しを図った。また、アセスメントの内容がQOL計画にどう反映されているのかについて、実践による検証を行った。

2 講演会（高教研講演会）

演 題：視覚障がいのある児童生徒の自立活動

講 師：筑波大学 准教授 佐島 毅氏

期 日：8月6日

参加者：57名

3 研修会

(1) 研修報告会

外部団体の研修会の内容を全職員で共有する場を3回設定した。

(2) 全校研究の各グループによる研修会の実施

(例 デジタル教材の活用研修、ブレイルメモを使った授業実践と機能紹介、粘土を使った触察体験など)

4 他の教育研究機関との連携

(1) 東北3県盲ネットワーク関連

①寄宿舍指導員研修会（8月1日）

②理療科実技研修会（7月26日）

③早期教育研修会（12月25日、本校主管）

④ロービジョン教育研修会（1月9日）

(2) 全日本盲学校教育研究大会熊本大会

(7月25日・26日)

(3) 東北盲学校教育研究大会山形大会

(11月7日・8日)

5 刊行物

研究集録としては刊行しないが、CDにまとめ、閲覧できるようにする。

岩手県立盛岡聴覚支援学校

研究テーマ

「子ども一人一人の主体的・対話的で深い学びの実現に向けて―自立活動の実践を通して―」

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

平成 29 年の特別支援学校学習指導要領では、特別支援教育においても主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた指導が求められている。「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の 3 つの視点から成り立ち、自立活動においても、子どもの主体的な姿を引き出しつつ、対話から深い学びへとつなぐ授業が必要であると考え。子どもが学びに対する必要感をもち、対話を通して自己の課題解決を図ることが自立活動の目標を達成するために大切である。

前回の全校研究では、研究の成果として子どものことばや場面に合った表現方法の獲得や筆談等のコミュニケーション手段の活用があげられたが、子どもの課題として、学習したことばを定型文のままやりとりしてしまい、日常の場面に活かすことができないことが挙げられた。一方、教員の課題としては、子どもが他者に伝えたいと思えるような活動の工夫の在り方が挙げられた。また、子どもが自己の考えを深めたり、問題を見出して解決策を考えたりする場面に課題があり、教員もその手立てを考えることに苦慮していることが分かった。さらに、多くの教員が自立活動を行う上で悩みや難しさを抱えている状況がある。本校の子どもの実態の多様化を踏まえると、個々の実態を的確に把握し、個別に指導目標や具体的な指導内容を定める自立活動の指導は必須であるが、そうした指導を実践するには多くの課題があると考え。

そこで、本研究では、自立活動に焦点を当て、実態把握から指導内容を選定する過程を各学部で共通理解する。また、授業づくりや実践を振り返りながら、自立活動の指導の組み立て方を各学部で再考する。これらを踏まえて、子ども一人一人の主体的・対話的で深い学びの実現に迫る。

(2) 研究の目的

子ども一人一人の主体的・対話的で深い学びを実

現するための自立活動の指導の在り方を明らかにする。

(3) 今年度の実践

①全校研究会

5 月：全校研究テーマについて

6 月：各学部の研究について

2 月：1 年次研究のまとめ

②学部研究会（11 回）

各学部でテーマを設定した研究会

③全校授業研究会

中学部：自立活動「自分自身を知り、周りの人に伝えよう」

2 各学部研究

(1) 幼稚部：「活動に興味をもち自ら遊びを広げるための環境構成の在り方」

(2) 小学部：「児童一人一人の意欲を引き出すための授業実践」

(3) 中学部：「他者の考えを知りつつ、自分の考えを表現しようとするための授業実践―自立活動の時間における対話的活動を通して―」

(4) 高等部：「対話を通して個々の考えを深め、言語表現の幅を広げる支援の在り方―社会参加を目指した自己の障がい認識を深めるディスカッション―」

(5) 寄宿舍：「一人一人の主体的な生活の実現に向けて―個別の支援計画の共有と指導実践の取組―」

3 講演会

演 題：「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて―聴覚障害教育における自立活動―」

講 師：東北福祉大学 教授 大西孝志 氏

期 日：令和 6 年 7 月 29 日（月）

参加者：76 名

4 研修会

・職員研修会（うち 4 回は外部公開）

5 他の研究機関との連携

・全日本聾教育研究大会東京大会

・東北聾教育研究会福島大会

・岩手県きこえ・ことば・LD 等教育研究会

盛岡となん支援学校

研究・研修テーマ

「学習指導要領に基づいた授業実践の充実を目指した取組」

1 校内研修

(1) 今年度の取組について

昨年度までの校内研究で挙げられた課題から、学習指導要領に則った教育活動・教育課程の実施に向け、研究部だけでなく教務部や自立活動支援部と連携した取組を行う必要があると分かった。そのため、今年度は研究テーマを掲げた校内研究を行わず、学習指導要領に基づいた授業実践に必要な基礎的・基本的な事項について教職員の共通理解を図るための校内研修を行うこととした。

【主な取組】

○カリキュラム・マネジメントの推進

- 授業の評価に基づいて、教育課程を評価・改善する仕組みの構築
- 個別の指導計画、年間指導計画の様式の見直し
- 自立活動の個別の指導計画の作成（新規）

○児童生徒の学習状況の把握

- 学びの履歴シートの活用

○指導と評価の一体化に向けた取組

- 単元案の作成

○「令和の日本型学校教育」への転換

- 職員の意識向上や理解啓発のための研修の実施

(2) 研修内容

- ①個別の指導計画（新様式）作成研修会
- ②教育課程と時間割を考える研修会
- ③自立活動の個別の指導計画作成研修会
- ④各教科等の単元構想研修会
- ⑤各教科等の単元案作成研修会①
- ⑥各教科等の単元案作成研修会②
- ⑦年間指導計画作成研修会

(3) まとめ

学習指導要領に基づいた授業実践に必要な基礎的・基本的な事項について、本校の教育課題と合わせて確認することができた。課題の解決に向けた取組については、研究部だけではなく教務部や自立活動支援部と連携することで、

教員一人一人が自分事として取り組み、学校全体としての取組につながる土台を築くことができた。カリキュラム・マネジメントサイクルの構築には3年間を見通した計画を立てている。令和8年度まで引き続き、取組を進めていく。

2 グループ研究

(1) 訪問てんくう（医大児童精神科）

Co-MaMe アセスメントシートを活用して実態把握を行い、自立活動事例シートの作成手順を確認し作成した。授業実践をし、成果や課題をまとめた。

(2) 訪問あおぞら（医大小児科）

自立活動の個別の指導計画作成手順を確認し作成する。計画を基に実践をし、成果や課題をまとめた。

(3) 寄宿舎

「寄宿舎目標の実現に向けた支援と指導の実施に向けて～系統的な支援を目指した寄宿舎活動の見直し～」をテーマに、学習会等の集団活動のアセスメントを行った。舎生の学びにつなげ、系統的な支援として継続するために、どのような取組、活動の工夫ができるのかを検討しまとめた。

3 講演会

演題：「特別支援学校（肢体不自由）における教育課程の編成と実際 - 学習指導要領の着実な実施に向けて -」

講師：国立特別支援教育総合研究所

上席総括研究員（兼）研修事業部長

吉川 知夫 氏

期日：令和6年8月2日（金）

参加者：97名

4 大会発表

演題：「自分の気持ちを言葉で表現する力を育むための国語の授業実践」

発表者：小学部・山本 綾子 教諭

「第70回全国肢体不自由教育研究協議

会熊本大会」学習指導Ⅱ（知的代替の教育課程）レポート発表

「第62回東北地区肢体不自由教育研究大会（宮城大会）」知的代替の教育の指導実践 実践報告

盛岡青松支援学校

研究テーマ

「生活の安定と他者との関係性を育む自立活動の取り組み」（2年度研究）

1 全体研究

（1）研究テーマ設定の理由

昨年度は「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた自立活動の取り組み」をテーマに掲げ、1年間の研究に取り組んだ。その結果、各学部共通の課題として「心理面の安定」「生活の安定」が挙げられ、これらの充実に向けた取り組みが必要であることを確認した。

そのため、今年度は学部の研究枠を離れ、小・中・高縦割りの3分科会を設定し、それぞれサブテーマを設定して実践を深めていくこととした。

（2）各グループについて

①生活の安定グループ

「生活の安定につなげる行動の枠組み作りとルーティンの設定」

対象生徒を高等部から1名抽出し、Co-Mameのアセスメントシートを用いて、具体的な課題を「感情のコントロール」「情緒の安定」「経験」に絞り、支援方法を検討した。対象生徒の1か月ごとの行動や気持ちの変化をグループ内で共有した。課題として時間的観念がほとんどないことを確認し、昼食後の休み時間から5校時への移動について、生徒中心に声かけを行うことを、1週間の振り返りシートを使用し取り組んでいる。目標を意識しながらいろいろな活動に取り組み、気持ちの安定も見られてきている。

②意欲の向上グループ

「モチベーションの維持を目指した学習活動の工夫と指導支援」

中学部生徒1名を抽出し、事例研究を行った。行動観察やCo-Mameアセスメントシート等の実態把握から、「授業の組み立てを工夫することで、学習活動に向き合える時間が増えるのではないか」と研究仮説を立てた。ケース検討会でいただいた助言をもとに、「安心」「見通し・集中」「自信」の3つを支援の柱として意識しながら、授業実践した。その結果、授業に取り組む時間は伸びているが、学習中につまずく場面も増えてきている。生徒の変容を受けて、どのように授業を組み立てて

課題である。

③自己表現グループ

「自己表現と言語化を育む指導・支援」

対象生徒を中学部から1名抽出し、事例研究を行った。Co-Mameのアセスメントシート等を用いて、課題を「感情のコントロール」「ストレスへの対処」「気持ちの表現」に絞り、研究仮説を「生活上の枠組みを明確にすることで見通しをもち、適切な行動ができるようになるのではないか」とした。ケース検討会で和歌山大学教育学部の米澤好史教授からいただいた助言をもとに、「感情のラベリング支援」も行うことを重視して感情の支援を行った。結果、不穏状態が減少し、自分の感情を表出する場面が増えた。

（1）グループ研究会

年間10回を基本に、各グループの推進状況により回数を調整し計画・実施した。

（2）ケース検討会

和歌山大学教育学部 米澤好史教授、岩手大学教育学部 鈴木恵太准教授を助言者としてお招きし、各グループの実践について報告し、児童生徒に対する指導・支援について具体的なアドバイスをいただいた。

（3）全体研究会（年2回）

①7月：各グループの進捗状況について中間報告

②2月：今年度の研究実践及び来年度の方向性についての共通理解

2 講演会

岩手県高等学校教育研究大会

演 題：「愛着障害と発達障害の理解と愛着の問題へのチーム支援」

講 師：和歌山大学教育学部

教授 米澤 好史 氏

期 日：令和6年7月29日（月）

参加者：44名

3 研修会

（1）Co-Mame研修（全病連心身症等教育研究推進委員会オンライン研修会）

（2）校内研修会（Co-Mameに関わる学習会）

講師：国立特別支援教育総合研究所

土屋 忠之 氏

盛岡峰南高等支援学校

研究テーマ

『「働く力」の育成を目指した実践
～ 専門教科・寄宿舎生活での取り組み ～』

1 令和6年度校内研究の概要

(1) 主題設定の理由

本校では、昨年度まで3年間同じ研究テーマで研究を進めた。新型コロナウイルス感染症が5類に移行したことや生徒の実態も変容してきていることを踏まえ、上記のテーマに変更した。

今年度は、昨年度あがった課題を解決すべく各科、寄宿舎で実践を積み重ねることで、授業改善等につながり、「働く力」が育まれると考え実践を行った。

(2) 研究の目的

各専門教科や寄宿舎において、確かな「働く力」を身につける生徒を育成するために、指導や支援の工夫を探る。

(3) 研究の内容

①「働く力」について、具体的にどのような点を伸ばしていくかを各科及び寄宿舎で確認し、授業実践を行う。

②「働く力」についての理解を深め、授業実践の一助とするために、研修、視察、先行事例についての情報を収集する。

(4) 令和6年度の実践

○第1回全校研究会（4月）

- ・前年度研究の成果と課題の確認。
- ・今年度研究の進め方について確認。
- ・研究授業指導案の様式についての確認。

○校内研修会（5月）相談支援部開催

「発達障がいのある生徒への理解と支援」

講師：岩手大学教育学部准教授

佐々木 全氏

○第1回全校授業研究会（7月）

- ・「働く力」を育成する授業に着目した学習指導案による研究授業及び授業研究会（加工生産科Ⅱ・Ⅲ）

○第2回全校授業研究会（7月）

- ・「働く力」を育成する授業に着目した学習指導案による研究授業及び授業研究会（生活科学科Ⅱ・Ⅲ）

○第3回全校授業研究会（7月）

- ・「働く力」を育成する授業に着目した学習指導案による研究授業及び授業研究会（農産技術科Ⅱ・Ⅲ）

○第4回全校授業研究会（9月）

- ・「働く力」を育成する授業に着目した学習指導案による研究授業及び授業研究（流通・サービス科Ⅱ・Ⅲ）

○第1回全校研修報告会（12月）

- ・研修報告

○寄宿舎職員研修会（12月）

- ・「卒業後の支援」
- ・「岩手県の特別支援教育について」

○第2回全校研究会（2月）

- ・今年度の実践研究のまとめ

○第3回全校研究会・第2回研修報告会（3月）

2 寄宿舎研究

(1) 概要

「働く力」の基盤となるのが生活であり、その生活を整えることが大事だと考えた。今年度は、生活全般をとおして棟ごとに生徒の課題を明らかにし実践を行った。

(2) 実践

男子棟1階：身だしなみを習慣化するための支援

男子棟2階：余暇の充実

女子棟：自らの課題に気づき意識するための支援

3 講演会

演 題：「知的障がいのある生徒のメンタルヘルスの理解と支援」

講 師：岩手県立大学 地域看護学講座 学校保健看護学分野

准教授 大久保牧子氏

期 日：令和6年8月2日（金）

会 場：盛岡峰南高等支援学校 寄宿舎

参加者：61名

4 刊行物

令和6年度 実践集録（令和7年3月発行予定）

岩手県立盛岡みたけ支援学校

研究テーマ

「児童生徒の実態に合わせた主体的・
対話的で深い学びに迫る授業づくり」
～観点別評価との往還を通して～

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

本校のこれまでの研究において学部横断的に教科等別の研究を深める等、「主体的・対話的で深い学びの実現を目指した授業づくり」を目指してきた。しかし前次研究の課題点として、重点をより明確にした授業づくりの必要性や、実態に合わせた学習課題の設定、また各教科等の観点及びその趣旨を踏まえた評価の在り方をより深めたいという点が挙げられた。そこで今年度からの2年研究では各学部における課題点のまとめから、「授業づくり」「評価について」を学部毎に取り上げ、学部研究会を中心に研究を進めることとした。

(2) 研究内容・方法

1年次は全校研究会において方針等を確認しながら、研究実践の主体は学部研究会に置き、学部毎に授業提案および授業研究会を中心に取り組むこととした。

(3) 全校研究会・授業研究会

年間で3回の全校研究会を行い、研究テーマや方針を確認しつつ、各学部研究の進捗状況等を全体で共有した。また年1回の全校授業研究会を開催し、今年度は小学部の生活単元学習の授業を参観（授業動画視聴含む）し、全教職員を10のグループに分けてグループ協議により授業づくりや学習評価等について深めた。

2 学部研究授業、学部授業研究会

(1) 小学部

① 3年 遊びの指導

「めざせ！カラフルはかせ」

② 6年 生活単元学習

「何が好き？英語で質問してみよう」

③ 2年 音楽

「みんなで音楽を楽しもう

～なかよしドレミ～」

(2) 中学部 1～3年

① 作業学習：木工班

② 作業学習：陶芸班

③ 作業学習：生産班

(3) 高等部

① 3年 生活単元学習

「アルバムづくり」

② 1年 国語

「学校生活上必要な言葉を覚えよう」

③ 2年 生活単元学習

「修学旅行に行こう」

3 教科情報交換会

5月、7月、12月に実施。日常生活の指導、音楽、体育、生活単元学習、作業学習の5つの教科等において、各学部の授業実践を見合い、情報交換を行った。他学部の授業の様子を知り、学部間の系統性について考える一助となった。

4 講演会

演 題：「学習指導要領を踏まえた授業づくり
～学びの連続性を実現する指導と評価
の在り方～」

講 師：東北福祉大学 教育学部 教育学科
教授 大西 孝志 氏

期 日：令和6年7月31日（水）

参加者：100名程度

二戸分教室・奥中山校とTeamsでの合同開催

5 研修会

(1) 職員研修の日

① 7月25日（木）

本校の卒業後の進路や福祉サービス、高等部の実習の様子など、進路指導主事による進路に関わる講話を実施した。

② 12月25日（水）

外部講師による発達検査（田中ビネーV）の研修を実施した。講義と演習を行い、検査の方法や検査結果の読み取りについて深めることができた。

(2) 校内タブレット講習会 8月19日

iMovieを使用した動画編集の基本的な操作演習を実施した。写真や音楽の挿入、レイアウト等について学ぶことができた。

盛岡みたけ支援学校奥中山校

研究テーマ

「児童生徒の主体的な学びを育む授業づくり」
～単元配列表の整理を通して～

(2年次研究の1年目)

1 全体研究

(1) 研究主題について

本校のこれまでの研究において、児童生徒の主体的な学びにつながる授業実践の推進を目指し、年間指導計画の見直しを行った。本研究では、各教科の年間指導計画に記載されている単元の配列を確認し、また、各教科との関連に焦点を当てて各教科同士のつながり確かめることとしたい。単元の配列や各教科との関連を見直すことにより、指導内容の偏りや各教科とのつながりが浮き彫りになり、さらに充実した年間指導計画に進化させることができるであろう。その指導計画に基づいた授業実践こそが児童生徒の確かな主体性を育むと考える。

(2) 研究の目的

三つの柱に沿って作成した年間指導計画を基に、単元の配列や各教科とのつながりを確認することにより、授業の質の向上につなげ、児童生徒の主体的な学びを育む授業づくりを目指す。

(3) 研究の方法(内容)

- ①カリキュラムマネジメントについての理解を深める。
- ②年間指導計画を基に単元配列表を作成し、教科の関連や指導時期、指導内容、配列などを整理する。
- ③年間指導計画と各教科との関連について、各教科等関連表の作成を通し、確認する。
- ④単元配列表、各教科等関連表を作成、整理することを通し、年間指導計画の評価・改善を行う。

(4) 研究の実際

①単元配列表の作成

学部ごとに、年間指導計画を基にし単元配列表の作成に取り組み、試案を作成した。

②各教科等関連表の作成

各学部で生活単元学習と各教科との関連を表に示し確かめた。

(4) 研究授業

単元名：マット、跳び箱名人になろう！
(体育)

対 象：小学部4・5・6年 5名

(5) 研究のまとめ

今年度は、年間指導計画を基に各教科の単元配列表・各教科等関連表(試案)を学部ごとに作成した。また、研究授業において、対象の単元が各教科とどのように関連しているかを確認し、学習内容や支援方法について深めることができた。今後も単元配列表の作成を進めることにより、年間指導計画を更に改善し、授業実践をととして児童生徒の主体的な学びの育成につなげていきたい。

2 講演会(みたけ支援学校本校との合同開催)

演題：「学習指導要領を踏まえた授業づくり」

講師：東北福祉大学教育学部教育学科

教授 大西 孝志 氏

期日：令和6年7月31日

3 研修会

○ 校内研修会①

「カリキュラム・マネジメントについての理解」

動画視聴(千葉大学校内研修シリーズ)

○ 校内研修会②

「特別支援教育における3観点の学習評価の見方・書き方について」

講師：岩手県立盛岡聴覚支援学校副校長

佐藤 修子 氏

期日：令和6年8月6日(火)

盛岡ひがし支援学校

研究テーマ

「日常の授業づくり」及び「日常の事例の検討」による学校教育目標を見据えた学部目標の追求（R6～R9）

～「授業の参観」及び「授業ライブラリー」の作成と活用を通して～

1 校内研究

（1）研究の目的

教師が主体的に取り組む「日常の授業づくり等」により、学校教育目標「児童生徒一人一人の可能性を伸ばし、心豊かで主体的に生きる人を育成する」を見据えた各学部目標を児童生徒一人一人の中に追求する。

（2）研究の内容

学級、学年、グループ等において、「日常の授業づくり等」を必要に応じて関わる職員で行う。

（3）研究の方法

- ①校内研究に関わる会議は、既存の職員会議、学部会、学年会等を活用する。
- ②「日常の授業づくり等」に以下の資料を活用する。
 - ・各教科の内容のまとまりごとの評価規準
 - ・ひがし通信R4・R5（学習指導要領の基本的考え方についてまとめた資料）
- ③教員同士の希望に応じた授業参観の実施
- ④授業ライブラリーの運用
 - ・学校フォルダ内に、校内研究の取り組みの成果である「日常の授業」の映像データ（可能な場合、指導略案を添える）」を提供し合い作成する。
 - ・必要に応じて視聴して授業改善に活用する。
- ⑤周知・報告は、岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会研究集録による。

（4）今年度の実践

個別の指導計画を作成するための資料に「各教科の内容のまとまりごとの評価規準」を位置付けた。

これをベースに、各担当者が各学級、学年、グループ等の「日常の授業づくり」に取り組み、必要に応じて「日常の事例の検討」を既存の会議等を活用しながら取り組んだ。

これらの研究成果について、授業の動画デー

タを募り、共有画像フォルダ内に以下の分類による17本の授業の動画データを収めた「令和6年度授業ライブラリー」を作成し、必要に応じて活用することができた。

ア	教科による指導	01国語
		02算数・数学
		03音楽
		04図画工作・美術
		05体育・保健体育
イ	教科以外の指導	06自立活動
		07総合的学習（探究）の時間
		08その他
ウ	各教科等を合わせた指導	09日常生活の指導
		10遊びの指導
		11生活単元学習
		12作業学習

また、授業参観記録表・授業観察個表を作成し、教員同士の希望に応じた授業参観を実施することができた。実施回数は少なかったことから、実施方法等について工夫するなどの検討が必要である。

2 講演会

演題：特別支援学校における地域と連携した学校づくり、授業づくりの在り方
～地域リソースを活かした主体的・対話的で深い学び～

講師：弘前大学大学院教育学研究科
教授 菊地 一文 氏

期日：2024年7月30日（火）

3 研修会

演題：発達障害の特性理解と支援

講師：岩手大学教育学部特別支援教育科
准教授 鈴木 恵太 氏

期日：2024年7月26日（金）

4 刊行物

研究集録は刊行していません。

5 他の研究機関との連携

○岩手県特別支援教育研究会

いわての特別支援教育63号（実践紹介）執筆
菊地 隆介 教諭

花巻清風支援学校

研究テーマ

「児童生徒一人ひとりの自立と社会参加を目指して」～身に付けたい力を明らかにした各教科等を合わせた指導の充実～

1 全校研究

(1) テーマ設定の理由

昨年度までの2年次研究（1年次は教科での取組、2年次は各教科等を合わせた指導での取組）の成果と課題を受け、本校の中心的学习活動である各教科等を合わせた指導について引き続き実践を積む必要があるというニーズから、今年度よりこのテーマのもと各教科等の目標や評価規準を明らかにした授業づくりとその改善を中心に進めることとした。

(2) 主な内容

- ・学習指導要領の理解(学習会)
- ・学部ごとに具体的な目指す姿の共有
- ・学部ごとに単元づくり、研究授業、授業研究会の実施
- ・できるだけ多くの職員が参観できるように研究授業の事前周知や動画保存を行う
- ・成果と課題を次の授業や単元、カリキュラムマネジメントに生かす
- ・学部内での情報共有

(3) 全校授業研究会

①研究授業

期日：令和6年11月20日(水)

対象：小学部1・2学年

単元名：「げんきランドであそぼう(ボール遊び)」(遊びの指導)

参観方法：参観及びビデオ視聴

②授業研究会

期日：令和6年12月6日(金)

内容：全体会、グループ協議(学部縦割り)

2 各学部研究

各学部・分教室が取り組んだ学習形態及び単元

(1) 小学部

①日常生活の指導

「朝の会」(6年1組)(6年3組)

(3・4年2組)

「はじまりの会」(訪問3年)

②生活単元学習

「なかよしまつりをしよう」(3・4年1組)

「おばけやしきをしよう」(5年2組)

「調理活動～収穫したサツマイモを調理しよう」(5年1組)

③遊びの指導

「げんきランドであそぼう(段ボール遊び)」(1・2年合同)

(2) 中学部

作業学習

「じまん市②に向けて、製品を作ろう」

(工芸班、カレンダー班、リサイクル班ごとに実施)

(3) 高等部

作業学習

「花巻清風オリジナルブレンドコーヒーを作ろう！」(食品加工課)

(4) 遠野分教室小学部

生活単元学習／自立活動(3・5・6年)

「さつまいもパーティーをひらこう」

(5) 遠野分教室中学部

併設校支援学級との交流の在り方、生活経験拡大に向けて

(6) 北上みなみ分教室小学部

生活単元学習(1・2・3・5年)

「ベンチを塗装しよう」

(7) 北上みなみ分教室中学部

作業学習

「南中販売会を成功させよう」

3 講演会

演題：子ども主体の学びを実現するための授業づくり～各教科等を合わせた指導をとおして～

講師：全日本特別支援教育研究連盟理事長

名古屋 恒彦氏

期日：令和6年8月5日(月)

外部参加者：10名

4 他の教育研究機関との連携

ステップアップⅡ研修講座「公開授業研究会」(県教委)

実施日：令和6年12月6日(金)

内 容：授業参観(ビデオ)、全校授業研究会

参加者：11名(内2名ステップアップ対象外)

5 刊行物等

HPにて公開予定

前沢明峰支援学校

研究テーマ

「生涯にわたって学び、成長しようとする力を高める授業実践・指導実践」

1 全体研究

(1) 研究テーマ設定の理由

(2) 研究の内容と方法

①研究の基本構想と共通理解

第1回全体研：5月 第2回全体研：2月

②全体研究テーマに基づく、各学部、寄宿舎の研究計画の作成と推進

ア 各学部研究、寄宿舎研究の内容、計画立案

イ 学部研究会(毎月)、寄宿舎研究会(年8回)

③授業実践とPDCAによる授業改善の取組

ア 授業研究会の開催：年3回(各学部提案)

(ア) 各学部の研究に基づく提案授業

(イ) 研究内容や推進状況について協議

イ 授業研究会まとめ資料の作成

ウ 授業研究会におけるアンケート実施

④研究のまとめ

ア 各学部、寄宿舎の研究発表及び協議

イ 本校のホームページで公開

2 各学部・寄宿舎研究の主な内容と方法

(1) 小学部

①全体研究、学部研究の共通理解

②「主体的に学習に取り組む態度」を実現するための「手立ての方向性」を検討

③単元計画シートの作成(目標、手立て、評価、改善を記入)

④授業実践(PDCAサイクルに沿った授業改善までの実践を学年で一単元ずつ発表)

⑤学部研究会での検討(児童の変容・支援の手立ての成果の確認)

⑥研究のまとめ

(2) 中学部

①学部研究の基本構想と共通理解

②教科学習(数学)の目標や内容の共通理解

③学習指導要領の教科(数学)の目標や内容の網羅を目指した仕組みづくり

④教科版授業づくりシートの作成とシートを活用した授業実践・授業改善の取組

ア 「学びに向かう力・人間性」の2つの側面を意識した目標設定や評価の共通理解と主体的に学習に取り組む態度を促す支援の手立ての考察

イ 「主体的・対話的で深い学び」を意識した授業づくり

⑤研究のまとめ

(3) 高等部

①学部研究の基本構想と共通理解

②作業学習における「学びに向かう力、人間性等」の具体化と共通理解

ア 生徒の実態や様子を「粘り強さ」「学習の調整」と照らし合わせて具体的に確認

イ 生徒に身に付けてほしい「学びに向かう力、人間性等」の具体化と確認

③作業学習における「主体的に取り組む態度」に着目した目標設定と評価

ア 「粘り強さ」「学習の調整」を意識した目標設定と評価

イ 「自分自身に関すること」「他者との関わりに関すること」を意識した目標設定と評価

④授業づくりシート等のさらなる活用と改善

⑤研究のまとめ

(4) 寄宿舎

①寄宿舎研究の基本構想と共通理解

②生活指導計画組み立てシート及び実践記録シートを活用した個別の生活指導計画の作成と共有

ア 年度内2サイクルの作成

③PDCAサイクルによる手立ての考案と実践

ア 全指導員一事例作成による意識向上と様式使用の習慣化

④研究のまとめ

3 講演会

演 題：「関係性のなかでとらえる発達の障害：愛着関係を中心に」

講 師：岩手大学教育学部特別支援教育科
准教授 滝吉 美知香 氏

期 日：令和6年7月26日(金)

10:00~12:15

参加者：106名

一関清明支援学校

研究テーマ

「児童生徒の主体性を育む支援のあり方について」
(2 年次研究 1 年目)

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

学校教育目標（めざす児童生徒像）である、「自分のよさに気づき、自己実現のための向上心をもちつづける人」を育てるために、児童生徒がどのような力を発揮しているのかを具体的に見取りながら、授業実践を積み重ねていくことにより、「質の高い学び」に努めている。また、実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿として示されている「個別最適な学び」、「協働的な学び」を一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげていきたいと考える。

主体的な学びの姿を引き出し、深めることで、「人やもの、ことを意識したり関わったりし、自分の考えを広げ、深めよう」とする対話的な学びが生まれ、「もっとやってみよう」、「次は工夫してやってみよう」、「学びを他の場面で生かしてみよう」という深い学びの姿につながる。そのため、前回研究で得た成果のさらなる充実と発展を図り、児童生徒一人一人の可能性を引き出すことができるような支援方法を探していきたい。

4 障がいに対応し、5 つの学び場をもつ本校は、各学部、分教室で実態に大きく違いがあり、校舎も離れていることから、互いを知り、高め合えるよう、情報共有や支援方法の共有にも継続して取り組みたいと考える。

(2) 研究目的

「主体的な姿」の具体的なあり方について、各学部や発達段階に応じて整理し、児童生徒の「主体性」を育むための支援方法のあり方の検証を行い、質の高い学びのための指導の充実を図る。

(3) 研究方針と内容

①めざす姿の整理

各学部や発達段階に応じて、めざす児童生徒の「主体的な姿」を整理し、共有する。

②研究実践

児童生徒の実態把握を元に実践を行い、各グループの現状や課題について整理する。

2 各学部・分教室研究テーマ

(1) 本校舎小学部

主体的に表現する力を育む～気持ちを安定させて活動に取り組むためには～

(2) 本校舎中学部

生徒の主体性を引き出す授業づくり

(3) 本校舎高等部

社会人・職業人として自立できる実践的な知識・技能・態度を育む支援のあり方
～高等部段階でのキャリア教育の視点から～

(4) 山目校舎小学部わかば学級

個々の学びを深め、集団学習や日々の生活に生かす授業づくり

(5) 山目校舎小学部なのはな学級

児童生徒の実態と手立ての共有

(6) あすなる分教室

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な実現をめざした授業実践

(7) 千厩分教室小学部・中学部

選ぶ そして 動く～児童生徒が選択できるような環境をととのえる～

3 講演会

演 題:「安心を届ける認知行動療法で発達にチャレンジする～学校での実践で大切なこと～」

講 師:東京認知行動療法センター 臨床心理士
松丸 未来 氏

期 日:令和 6 年 7 月 31 日(水)

参加者:105 名

4 研修会

(1) 第 4 回北海道東北病連研究協議会秋田大会

(2) 東北聾教育研究福島大会

(3) 第 65 回全国病弱虚弱教育研究連盟研究協議会 (栃木大会) オンライン視聴

5 他の教育研究機関との連携

(1) 高教研講演会

岩手県病弱・虚弱教育研究会と合同開催

気仙光陵支援学校

研究テーマ

「児童生徒が「できた」「わかった」と感じられる授業づくり」 ～学習の振り返りの充実～

(2年次研究2年目)

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

岩手県が掲げている「いわての授業づくり3つの視点」(視点1:学習の見通し)(視点2:学習課題を解決するための学習活動)(視点3:学習の振り返り)の中から、本校では日々の授業づくりをする上で簡略的になりがちな(視点3:学習の振り返り)に焦点を当てて研究することとした。

児童生徒自身が分かって活動できる目標を設定し、その上で充実した振り返りを行う。そうすることによって児童生徒は「できた」「わかった」という達成感を感じられ、次の学習への意欲につながるのではないかと考え、研究テーマを設定した。

(2) 研究の目的

児童生徒自身が分かって活動できる目標設定と、それに基づく「学習の振り返り」を検討、実践することにより、児童生徒が「できた」「わかった」と感じ、次の学習への意欲につながる授業づくりをする。

(3) 研究内容

- ①1年次に有効であった他学部の成果を取り入れながら、各学部で継続して実践を行う。
- ②児童生徒の「できた」「わかった」の姿を明確にする。
- ③2年間の研究で、有効であったシートや日誌の様式、支援方法等についてまとめる。
- ④研究のまとめ(H Pによる研究公開)

(4) 今年度の実践

- ①各学部・寄宿舎ごとの研究
- ②授業研究会の実施(開かれた授業研究会)
 - ・第1回:小学部 生活単元学習
助言 岩手県総合教育センター
主任研修指導主事 阿部真弓 氏
 - ・第2回:中学部 作業学習
 - ・第3回:中学部 作業学習
- ③研究のまとめ

2 各学部・寄宿舎研究

(1) 小学部

生活単元学習の行事単位における事後学習の方法や形式について、対象児童を抽出し、学習内容や目標設定、支援の有効性を検討した。事後学習における有効的な活動や単元構成の在り方などについてまとめた。

(2) 中学部

昨年度同様、作業学習を研究対象とし、より個人に焦点を当てて振り返りの充実を図った。生徒一人ずつ記録シートを作成し、「できた」「わかった」の姿や、手立て・支援、生徒の様子を記録した。記録シートを職員間で共有しながら授業改善をし、成果と課題をまとめた。

(3) 高等部

作業学習を研究対象とし、目標設定と評価の観点、生徒が主体的に振り返り、次の目標につながるができる振り返りのありかたについて実践研究をすすめた。作業中の生徒への支援、作業日誌の様式や作業終礼時の振り返りなどの授業改善の成果と課題をまとめた。

(4) 寄宿舎

昨年度に引き続き、各棟の行事活動とその振り返りをテーマとして実践研究を行った。行事の企画運営を通して、主体性の伸長や自己肯定感・有用感の高まりが図られるよう留意し、その成果と課題についてまとめた。

3 講演会

演題:「子どもの発達と個に応じた支援

～『できた』『わかった』と感じられる

授業づくりを目指して～」

講師:宮城学院女子大学 教育学部教育学科

教授 梅田 真理 氏

期日:令和6年9月13日(金)参加者:46名

4 刊行物 研究収録は刊行していません。

釜石祥雲支援学校

研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を実現する

教材を視点とした授業づくり

(2年研究2年次)

1 全体研究

(1) 主題設定と目的

これまでの研究で、単元の見直しや教科との関連、年間指導計画の新様式などについて研究を進めてきた。昨年度は教材を視点に授業づくりについて研究を進め、校内にある教材のデータベースや教材リンク集を作成し授業への活用のベースづくりを行った。今年度は授業実践への活用を中心に進めた。

(2) 研究の内容及び方法

- ①授業チェックシートの活用
- ②研修会や検討会を行い、共通理解を図る
- ③教材データベースの更新と活用
- ④授業づくりに関する情報共有
- ⑤全校での共通理解
- ⑥教材を視点とした授業研究会

(3) まとめと課題

これまでの研究の積み重ねを基に、授業実践を中心に取り組んだ。また、高教研講演会や校内研修会で教材ができるまでのストーリーや開発者の思いを知ることができた。

児童生徒は日々成長していき、社会で求められる能力も変化していく。指導する側も成長や変化を感じ取り対応していかなければならない。今後求められる力として ICT の活用がある。ロイロノートや iPad の活用について、今後の課題としたい。

2 各グループ研究

(1) 小学部グループ

算数科を中心に授業実践を行った。小学部児童に対する数量の指導にあたって、指導の段階や教材の提示の仕方や工夫について、具体的な内容で協議した。

(2) 中学部グループ

作業学習の家庭班で取り上げる製品開発について検討を行った。調理作業では、生徒の実態や調理方法、時間、経費などを踏まえて、試作や試食などを行い検討した。

(3) 高等部グループ

iPad を活用した授業実践について、「岩手の情報活用能力体系表例」を活用した生徒の実態把握を行うとともに、使用するアプリの機能や活用の仕方の検討を行った。

(4) 自立活動グループ

小学部、分教室、中学部・高等部合同グループの3つの自立活動の授業研究会と教材検討を中心に行った。一人一人のできる動きを最大限に引き出しながら、仲間を感じて一緒に楽しむことのできる活動内容や教材の在り方について検討を行った。

3 講演会

演 題：コミュニケーション手段を考える

～ドロップレット・プロジェクトの

取り組みについて～

講 師：ドロップレット・プロジェクト

代表 青木高光 氏

期 日：令和6年8月1日(木)

参加者：103名

4 研修会

(1) 校内研修会①

「各教科等を合わせた指導の目標設定と

評価について」

講師：本校副校長 中館 崇裕

期日：令和6年5月29日(水)

(2) 校内研修会②(教材研修会)

「教材ができるまでのストーリーと活用事例」

講師：(株)くもん出版 企画開発部

部長 堤 嘉代 氏

編集2チームリーダー 星野由香 氏

期日：令和6年8月29日(木)

5 他の教育研究機関との連携

○全国病弱虚弱教育連盟脳性まひ部会実践事例集

自立活動グループの実践レポート提出

○岩手県教育研究発表会特別支援部会

研究成果の発表

宮古恵風支援学校

研究テーマ

児童生徒の学びの充実を実現する授業づくり
～すべての児童生徒が「分かる！」とを感じる
授業を目指して～

1 全体研究

(1) 主題設定の理由

本校では、これまでの研究で児童生徒の学びが充実するような授業を目指し、「いわての授業づくり3つの視点」に基づいた授業実践に取り組んできた。また、学習指導要領を踏まえた学習評価の充実に向けて取り組み、指導と評価の一体化を目指してきた。具体的には、「授業づくりシート」の活用と「観点別学習状況の評価」をもとにした授業改善である。

本研究では、さらに学びが充実するためには、児童生徒の目線に立ち、すべての児童生徒が「分かる！」とを感じる授業づくりが必要であると考え、本研究に取り組むこととした。

(2) 研究の目標

- ①すべての児童生徒が「分かる！」と感ずることが出来る授業づくりの考え方や授業づくりの工夫について明らかにする。
- ②「分かる！」と感ずる授業づくりの考え方が定着し、授業の計画、実践、評価、改善に生かすようにする。

(3) 研究の内容

研究の内容については、各学部研究に示す。

2 各学部研究

(1) 小学部

各教師が、課題に感じていることの中からポイントを絞り、実践事例として取り上げ共有した。また、一つの事例に関わりのある教師でチームを組み、意見を出し合った。その中から児童が分かって取り組むために必要な「児童の見取り」や「具体的な手立て」などについて学部で共有し、翌日から全員で同じ指導を行うことを目指した。

児童の「かすかな変容」を捉えていったことで、どの教師も自身の指導に手応えを感じることができ、それらがさらに、教師が「日常的に児童の目線に立った具体的な学習活動を考える」ことにつながり始めた。

(2) 中学部

生徒が「自分でできる姿」を目指し、環境や支援を整えるために以下の①～⑦の視点に基づき職員間で共通理解を図り、学校生活を見直した。

①整理整頓、②集中できる場づくり、③ルールづくり、④見通しの提示、⑤分かりやすい説明、⑥参加できる方法、⑦できるようになる工夫

そして、教室の黒板や壁面の整備、ロッカーの使い方の統一、学校生活のルールと支援に使用するイラストの統一をした。

この取り組みにより、生徒の授業中の態度の改善が図られ、自分から授業の準備をしたり、活動に集中したりする姿が増えてきた。

(3) 高等部

国語、数学、芸術科目（音楽・美術）、作業、重複学級のグループに分かれ、授業の様子を共有し、授業を実践する上での課題とその解決に向けた意見交換を行った。授業者は、グループ内で出された意見を基に授業の計画を立てたり、生徒一人一人の課題に応じた活動を検討したりし、授業改善に取り組んだ。

通年で高めたい力や、授業内で確認したい学習事項を整理することで、まとまりのある学習活動にすることができた。また、タブレット端末の他にトランプ、かるたのような玩具など生徒の実態に合った教材を取り入れることで生徒が意欲を継続して取り組む姿が増えてきている。多面から実態把握を行うことにより、一人でできる活動を見直すことができた。

3 講演会

演 題：ユニバーサルデザインに基づくわかる授業づくり

講 師：静岡大学 准教授 山元 薫 氏

期 日：令和6年7月29日

参加者：70名

久慈拓陽支援学校

研究テーマ

「一人一人の可能性を伸ばす授業づくり～各教科等を合わせた指導と各教科等との『つながり』を意識した取組を通して～」(3年次研究：2年目)

1 全体研究

(1) 研究主題設定の理由

1年目の研究では、授業づくりにおいて「教科間のつながり」や「学部・学年間のつながり」が具体的に検討されなかったという課題の改善に向け、「各教科等を合わせた指導」と「各教科等」とのつながりを確認する実践研究を行った。生活単元学習及び作業学習を研究対象とし、シート等を用いて各教科とのつながりを確認しながら授業づくりを行った。「各教科等を合わせた指導」と関連する教科への意識が高まったことが成果として挙げられた一方で、関連する教科の目標や内容が十分に授業づくりに反映されていなかったこと等が課題として挙げられた。

このことから2年次は1年次の研究を継承する形を取り、シート等を活用した授業実践に加え、学習指導要領を用いて教科間のつながりをより具体的に確認するなど、授業づくりに取り入れることができるよう、研修を兼ねた研究を推進した。

(2) 研究の目的

一人一人の可能性を伸ばす教育活動を目指し、各教科等を合わせた指導の授業づくりの中で、学習指導要領の各教科等の指導内容を具体的に引き上げ「教科間のつながり」を検討することで、教育活動の改善を図る。さらに、学年・学部間で実践を共有し、系統的な学習活動への意識を高める。

2 研究方法

研究は主に学部ごとに推進する。単元・題材シートと個別の評価シートを使用し、学習グループごとに授業計画を立てて実践する。授業計画にあたっては、「目指す姿」や「教科間のつながり」をグループで協議し、共有する。単元・題材終了後には三観点での評価(単元・題材、個別)を検討する。研究対象の単元・題材や児童生徒はグループで設定する。教科との関連については、小学部から高等部まで全学部を通して学習する国語・算数(数学)に焦点をあて、

学習指導要領の内容や目標等を確認しながら授業づくりに取り入れる。

3 各学部研究

(1) 小学部

低学団は「ヨムノスに行こう(1、2年生校外学習)」、高学団は「青森に泊まりに行こう(5年生宿泊学習)」を研究対象単元として取り上げた。ウェビングマップを活用し、単元で取り組む学習内容と関連する教科の内容を検討した。実践後は、児童の課題の改善に向けて国語・算数の授業で取り組む内容をグループ内で協議し、今後の授業づくりに生かせるよう共有した。

(2) 中学部

作業学習を研究対象とし、木工班と紙工班のどちらも後期校内実習を対象単元に取り上げた。初めに中学部の作業学習で「目指す姿」を全体で協議し、共有した。ウェビングマップを活用し、作業学習における各教科の要素および関連する国語・数学の学習内容を確認し、授業づくりに生かした。対象単元の実践後に見えた成果と課題を基に、国語・数学の授業で取り組みたい内容について検討した。

(3) 高等部

作業学習を研究対象とし、4班が各自で対象単元を決めて取り組んだ。初めに「教科関連検討シート」を作成し、作業学習の内容がどの教科の内容に該当するのか協議した。清掃班の対象単元「ワックス掛けをしよう」は第二回全校研究会の提案授業とし、学部職員以外にも多数の意見をもらった。作業内容と関連する国語・数学の内容を共有し、班内で作業内容の調整や工夫を行った。

4 講演会

演 題：「自立と社会参加を見据えた指導・支援のポイント」

講 師：神戸女子大学 田中 裕一 氏

期 日：令和6年8月2日(金)

参加者：50名

岩手大学教育学部附属特別支援学校

研究テーマ

各教科等における見方・考え方を働かせ、主体的に活動する姿を目指した授業づくり

(2年次研究の1年目)

1 校内研究

(1) テーマ設定の理由

前次研究では、情報活用能力の育成に取り組む、本校の「授業づくりの実践研究」の蓄積に情報活用能力の視点やICT活用の視点を取り入れ、児童生徒の情報活用能力の育成と学習活動のより一層の充実に向けた授業改善を行ってきた。そこで課題となったことは、各教科等の目標を捉えることの必要性和各教科等の資質・能力の評価の検討である。

今次研究では、この課題に迫るべく各教科等における見方・考え方(以下、見方・考え方とする)を働かせ、主体的に活動する姿を目指した授業づくりに取り組んでいくこととした。

(2) 研究の目的

育成を目指す資質・能力の視点及び各教科等における見方・考え方の視点での授業づくりを行い、各教科等における見方・考え方を働かせ、主体的に活動する姿の実現を目指す。

(3) 研究の内容と方法

①実態把握と評価

②見方・考え方を働かせる授業づくり

③全校研究会、学部研究会

(4) 研究の実際(1年次)

①実態把握と評価

学習指導要領の目標、内容の一覧をベースに実態把握を行い、それを基に目標、段階における評価規準を設定した。

②見方・考え方を働かせる授業づくり

国語の学習においては、国語科の目標が実現されるよう、言葉による見方・考え方を働かせる、児童生徒の実態に応じた言語活動を設定し、授業改善を図った。

算数/数学においては、算数科、数学科の目標が実現されるよう、数学的な見方・考え方を働かせる、活動の楽しさを味わったり、生活に活用したりできるような数学的活動を設定し、授業改善を行った。

③ 全校授業研究会、学部研究会

・第1回全校授業研究会(7月)

高等部 トライ学習1組 数学

単元名 「販売会の売り上げをグラフにまとめよう」

・第2回全校授業研究会(7月)

小学部 3・4年すみれ組 国語

単元名 「おはなしできるかな」

・第3回全校授業研究会(11月)

中学部 おもしろ学習2組 国語

単元名 「あにわ祭ステージ発表のストーリーを楽しもう」

全校授業研究会は「公開授業研究会」として岩手県内の特別支援学校や近隣の小中学校等へ開催案内し、研究会へ参加していただき授業についてご意見等をいただいた。

学部研究会は、各学部3回の授業研究会と、必要に応じて数回の研究会を実施し職員で共有を図った。

(5) 研究のまとめ

各教科等の資質・能力の育成を目指し、各教科等における見方・考え方を働かせる言語活動、数学的活動を設定することで、児童生徒の「主体的に活動する姿」が見られるようになってきた。また、指導者側にも、児童生徒が見方・考え方を働かせるために、発問の仕方や、教材の提示等に変化が見られるようになってきた。しかし、実態把握の点では、各学部や指導者の中で相違が見られた。また、児童生徒の教科の学びの連続性の視点からも、取り扱った各教科等の目標・内容、前段階の目標・内容に替えた場合についての記録の必要性が課題となった。

2年次には、全学部共通のツールを用いて実態把握をし、目標設定や評価規準の設定をした上で、見方・考え方を働かせる授業づくりの在り方を検証し、児童生徒の主体的に活動する姿を目指していきたい。

2 講演会

演題: 「各教科等における見方・考え方を働かせる授業のための単元づくり」

講師: 国立特別支援教育総合研究所研究員
横尾 俊 氏

期日: 令和6年7月26日(金)

参加者: 37名

三愛学舎

研究テーマ

・「対話」について問い、学ぶ。

1 全体研究

(1) 研究の目的

専攻科ゼミをはじめとして、三愛学舎の多方面で使われ実践されている「対話」について、それぞれがどのように理解して使っているのかを改めて考え学ぶとともに、教職員間の「対話」についても問い、対話的な組織をめざす。

(2) 研究内容および方法

①校長による講話

「対話における学習を通して、自己肯定感を高める」をテーマに、おもに専攻科ゼミの学習の事例を通して、対話による相互作用について学んだ。

②研究授業

専攻科ゼミの「なぜ僕らは働くのか？」と本科2年生総合探究の「やりがいについて」の授業について実施した。

③高教研講演会

演題:「対話について学ぶ～生徒教職員が共働
できるために～」

講師:筑波大学人文社会系准教授

五十嵐 沙千子氏

期日:2024年10月18日(金)

参加者:約35名

④研究授業の視聴とグループでの意見交流

授業のなかでの生徒の姿から「対話」について学ぶとともに、教職員個々の「対話とは？」という問いに対しての考えを話し聴くことを通して、「対話」への考えを深めた。

2 研修会

(1) 新職員研修

担当生徒の事例検討を通して、助言等を今後の実践に活かすとともに、新職員の働きや努力を皆で評価することを目的に、担当生徒の事例検討とモニタリングを実施した。

(2) 奥中山学園との合同研修

奥中山学園(障害児入所施設)の職員と合同で実施した。

テーマ:愛着障害がある生徒への考え方と対応について～両者が一体となり取り組むために～

内容:嶋野重行氏(盛岡大学短期大学部教授)より「愛着の理解について」をテーマに講演を聴き、事例検討を行った。

期日:7月22日(月)

(3) ワークショップ

生徒の学習活動を教職員同士で教え学び合うことで、生徒の活動内容の理解や職員間のチームワークを深めることをねらい、菱刺しや食品加工、ハンドベル演奏等を体験した。

(4) 夏季研修

三愛学舎の教育課程編成に関して、「職員の意識改革」や「三愛学舎がめざす学び(多様性を認め合う学び、生徒主体の学び、食・表現・対話を大切にしたい学び、地域社会とつながる学び等)」について、意見交流を行った。

(5) 秋季研修

「三愛学舎のめざす学び」の一つである「地域社会とつながる学び」を推進することを目的に、杉田早苗氏(岩手大学准教授)による学校と地域の連携・共働に関わる講義と奥中山地域を巡るワークショップを実施した。また、地域を意識した作業学習について検討を行った。

(6) 冬季研修

教育課程編成の概念図の「4つの力(つながる、感謝する、楽しむ、働きかける)」と「4つの力を養う学び(ことば、食、表現、仕事)」についての理解を深めるとともに、「好きを学ぶ」をテーマに「授業選択」や「生徒とつくる」、「学びのペース」等について、意見交流を行った。

3 外部研修

希望者が参加した。研修後に研修報告書を作成し、職員間で回覧した。

岩手県高等学校教育研究会規約 (令和5年4月1日 全部改正)

(名称・事務局)

第1条 本会は、岩手県高等学校教育研究会と称し、事務局を会長所在校に置く。

(目的・事業)

第2条 本会は、岩手県内の高等学校及び特別支援学校の教育振興のため研修することを目的とし、次の事業を行う。

1. 教科及び教育に関する調査研究
2. 前項についての成果の発表
3. 他の教育研究機関との連携
4. その他目的達成に必要な事項

(構成)

第3条 本会は、岩手県内の高等学校及び特別支援学校の校長並びに教員をもって構成され、学校単位に加盟を認める。

(役員)

第4条 本会に次の役員を置く。役員の任期は2カ年とする。ただし再任を妨げない。補員の任期は前任者の残任期間とする。

1. 会長 1名：評議員会において選出する。本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長 2名：評議員会において選出する。会長を補佐し、会長不在の時は代理する。
3. 評議員 : 加盟校の校長全員とする。評議員会を組織し、重要事項を審議決定する。
4. 理事 : 部会長とする。部会の運営にあたる。
5. 監事 3名：評議員会で選任する。会計を監査する。

(会議)

第5条 本会は、以下の諸会議を持つ。いずれも3分の2以上の出席(委任状は出席と認める)で成立し、議決は出席者の過半数による。同数の場合は議長が決する。

1. 評議員会：本会の最高機関である。年2回会長が招集し、役員、事業、会計、その他の重要事項を決する。なお、会長は必要に応じ臨時に開催することができる。
2. 理事会：会長が必要により随時に招集することができる。
3. 監事はすべての会議に出席することができる。

(部会)

第6条 本会に次の部会を設け、部会長を置く。部会長は評議員から推薦し、評議員会で承認する。

- | | | | | | |
|----------|----------|----------|------------|----------|--------|
| (1)国語 | (2)地歴・公民 | (3)数学 | (4)理科 | (5)保健体育 | (6)音楽 |
| (7)美術・工芸 | (8)書道 | (9)英語 | (10)家庭・福祉 | (11)農業 | (12)工業 |
| (13)商業 | (14)水産 | (15)情報 | (16)特別支援教育 | (17)学校保健 | |
| (18)進路指導 | (19)図書館 | (20)生徒指導 | (21)教育相談 | (22)国際教育 | |

(経費・会計年度)

第7条 本会の経費は会費、その他の収入をもってあてる。本会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わる。

(会計)

第8条 会計に関する規程は、別にこれを定める。

(改正)

第9条 規約の改正は、評議員会の議決による。

付則 本規約は、昭和40年4月1日から施行する。

昭和58年4月1日	一部改正
平成4年4月1日	一部改正
平成8年4月1日	一部改正
平成15年4月1日	一部改正
平成18年4月1日	一部改正
平成30年4月1日	一部改正
令和2年4月1日	一部改正
令和4年4月1日	一部改正
令和5年4月1日	全部改正

岩手県高等学校教育研究会 会計に関する規程 (令和6年4月1日 全部改正)

岩手県高等学校教育研究会規約第8条により、会計に関する規程を次のとおり定める。

第1条 会費の額は、評議員会で定める。

第2条 本会の加盟校は、自校の校長並びに教員(いずれも常勤の者)の人数分の会費を、評議員会が指定した期日までに納入する。

第3条 各部会の配分額は、評議員会で決める。

付則 事務執行細則を廃し、令和6年4月1日制定

令和6年度確認事項(令和6年5月14日 一部訂正)

(1) 全体的なこと

ア すべての会員の会費によって各部会が維持されることから、次の原則で公平性を保つ

- ・繰越金が多い部会の配分を減じて、全体の会費負担を適正にする
- ・各部会においては、年度を超えての積立、汎用物品等の購入、慶弔支出はおこなわない
- ・高校と特別支援学校では登録する教科の部会の数が異なることから、今年度の会費は、高校2,500円、特別支援学校1,500円とする

イ 非常勤など会費負担のない会員登録も可とする

ウ 今年度の各部会への配分額については次による

- ・配分の基準は、部会の直近の支出実質決算額に基づく
- ・繰越の多い部会については、配分の上限を設ける

繰越400万円超の部会 上限30万円

繰越100万円超の部会 上限50万円

エ 次年度の配分額と会費は、各部会の前年度決算報告等に基づき、第2回評議員会で提案する

オ 上部研究会の大会(東北大会・全国大会)などに備える会計(従来の積立など)のあり方については検討課題とし、将来、必要に応じて「会計に関する規程」に追加する

(2) 加盟校関係

ア 会費を支出する会計は、教員(高教研会員)の会費負担のある会計による

(3) 部会関係

ア 研究会の要項、研究集録などの成果物のpdfは、本部事務局へも送付する

開催要項・成果物はすべての会員が参加・利用できるよう本部事務局がウェブ等で公開する

岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会規約

(名 称)

- 1 本会は岩手県高等学校教育研究会特別支援教育部会と称し、事務局を部会長所属校に置く。

(目的及び事業)

- 2 本会は特別支援教育の振興を目的とし、次の事業を行う。

- (1) 各校の研究・研修の充実のための支援
- (2) 研究集録等の発行
- (3) その他目的達成に必要な事項

(会 員)

- 3 本会の会員は次のとおり登録するものとする。

- (1) 特別支援学校に所属する校長および教職員は、本会に会員登録する。
- (2) 会員のうち、非常勤講師を除く教職員は岩手県高等学校教育研究会に会費を納める。

(役員等及び任務)

- 4 本会に次の役員等を置く。

- (1) 部会長：会を代表し、会務を統括する。部会長の任期は3年とする。
- (2) 副部会長：部会長所属校の副校長が担当する。部会長を補佐し、部会長に事故あるときはこれを代行する。
- (3) 理 事：特別支援学校長を理事とし、本会の助言にあたる。
- (4) 監 査：部会長所属校の会員を監査とし、事務局会計を監査する。
- (5) 事務局員：部会長所属校から選出する。部会事務並びに会計にあたる。会計は予算書及び決算書を作成する。
- (6) 各校担当者：全ての特別支援学校に担当者を置く。

(会 議)

- 5 本会に次の会議を設置する。

- (1) 総会：年1回部会長が招集する。必要に応じて臨時に招集することができる。
- (2) 理事会：必要に応じて部会長が招集する。

(会 計)

- 6 本会の会計は岩手県高等学校教育研究会からの部会配分金をもってこれにあてる。

附則 本規約は、平成23年4月1日より施行する。

本規約は、平成31年4月1日より施行する。

本規約は、令和4年4月1日より施行する。

本規約は、令和5年4月1日より施行する。

※部会長担当の順

年度	H28～29	30～R2	R3～5	6～8	9～11	12～14
部会長	久慈	気仙	釜石	宮古	久慈	気仙

研究集録 第 52 卷

発 行

令和 6 年 3 月 13 日 発 刊
岩手県高等学校教育研究会
特 別 支 援 教 育 部 会

《事務局》

岩手県立宮古恵風支援学校

〒027-0097

岩手県宮古市崎山第 5 地割 88 番

T E L (0193)63-0400 F A X (0193)64-3617